



ミサワホーム株式会社

基幹システムの基盤をクラウド技術で強化 仮想化によるサーバー統合・移行を推進 将来はWindows・Linux系サーバーを10分の1に集約

■要件

基幹業務システムをSaaSとしてグループ企業へ提供している。クラウド・コンピューティングの技術を適用し、システムの柔軟性を高めるとともに、長期的に運用の自動化といった高度な仕組みの実現を目指している。

■ソリューション

仮想化技術を用い、システムを最新のサーバー機に統合・移行する。ハードウェアの削減、ライフサイクル・ギャップの解消、スペース利用効率の向上などを実現するとともに、バックアップなどの運用を見直す。

■成果

第一弾として、UNIXサーバー1台とWindows・Linux系サーバー12台をそれぞれ仮想化環境へ移行した。今後、160台あるWindows・Linux系サーバー台数を10分の1に集約するなど、大規模な仮想化を計画している。

基幹業務システム基盤の高度化へサーバー仮想化技術の適用を検討

「住まいを通じて生涯のおつきあい」というコーポレートスローガンのもと、「住まいのNo.1ブランド」を目指すミサワホーム。「100年住み継がれる住まい」などを目標に、優れた技術とデザインを持つ商品を次々と送り出している。

ITについても、経営トップの判断をスピーディに反映できる組織を採用し、「差別化」「効率化」「マネジメント強化」に基づく改革を推進してきた。2003年には、販売会社などグループ企業の基幹業務システムの大半を、ミサワホームがネットワーク経由でサービスとして提供するSaaS（ソフトウェア・アズ・ア・サービス）型に変更することで、グループ全体のシステムを一元化している。

「仮想化」は、その先進的なシステムをさらに進化させる技術の一つである。経営企画本部 経営企画部 情報システム担当部長の北上義一氏は、「クラウド・コンピューティングの技術を積極的に取り入れて、変化に

強いIT基盤を構築するとともに、長期的には運用の自動化といった高度な仕組みを実現したいと考えています」と語る。

第一弾として取り組んだのは、住宅を契約したお客様情報・建物情報等を一元管理する顧客情報システム「MECIA」の仮想化だ。同システムのSolarisサーバー1台と、Windowsサーバー12台について仮想化環境への移行と統合を検討した。

経営企画本部 経営企画部 システム企画グループの森嶋浩之氏は、その背景を「システムを現状のまま最新のサーバー機へ移行するなど、ハードウェア寿命の影響を受けまい柔軟な環境を構築する必要がありました」と述べる。

Solarisサーバーでは、MECIAのバックエンドとなるOracle Databaseが稼働していたが、導入から年数が経ち、周辺機器の一つで保守サービスの終了期限が迫っていた。

Windowsサーバーでは、MECIAのフロントエンドとなるWebサーバーなどが稼働していた。やはりハ

ドウェアの保守期限の関係で、優先的に仮想化を検討する必要があったという。

こうした要件をSolarisサーバーとWindowsサーバーそれぞれについて示し、複数のベンダーへ提案を依頼したのが2008年秋である。その結果、ミサワホームは両サーバーの仮想化を進めるパートナーとして、新日鉄ソリューションズを選ぶ。

UNIXとWindowsを並行して仮想化OSごとシステムを新機種へ移行

森嶋氏は選定理由を「新日鉄ソリューションズには、Oracle Databaseを利用して、当社の基幹システムを構築した実績がありました。提案内容も、当社の課題に正面から取り組んでいました」と語る。

仮想化プロジェクトがスタートしたのは2009年1月である。SolarisサーバーとWindowsサーバーの作業をほぼ並行して進めた。

Solaris OSは標準で「Solarisコンテナ」という仮想化機能を装備している。この機能を用いるとSolaris 10



ミサワホーム株式会社
経営企画本部
経営企画部
情報システム担当部長
北上 義一氏



ミサワホーム株式会社
経営企画本部
経営企画部
システム企画グループ
森嶋 浩之氏



ミサワホーム株式会社
経営企画本部
経営企画部
システム企画グループ
柿沼 昭宏氏

上にSolaris 8など以前のバージョンのOS環境を構築して、Solaris 8までの動作保証しかないバージョンのOracle Databaseを導入できる。

だが、実際のシステムで実際に使えるという保証はない。そこで、ミサワホームは新日鉄ソリューションズにSolarisコンテナの検証を依頼。1カ月間のテストによって性能面などの問題がないことを確認してから、仮想化環境への移行をスタートした。移行作業は急ピッチで進められ、2009年3月中旬にSolarisコンテナによる仮想化環境が稼働する。

経営企画本部 経営企画部 システム企画グループの柿沼昭宏氏は、新日鉄ソリューションズの働きぶりを「定例会議には、システム管理ツールなどを扱う他ベンダーも参加しましたが、先頭を切って議論をまとめました。導入に際して発生した各種課題についても優先順位をつけて、的確に対処していただきました」と評価する。

一方、Windowsサーバーではサードパーティ製の仮想化ソフト

■コアテクノロジー サーバー仮想化、仮想化環境の検証、VMware ESX、Solarisコンテナ

- システム概要
- サーバー：VMware ESX×3、Solaris 10×1など
- ミドルウェア：Oracle Database、VMware Consolidated Backup

「VMware ESX」を用い、5月までに統合・移行作業を完了した。VMware ESXを導入した3台の物理サーバーに、12台のWindowsサーバーを仮想化して集約。VMware VMotionという機能で、仮想化したサーバーを稼働中でも別の物理サーバーへ移動できるようにしている。

今後はWindows・Linuxを統合160台をわずか10分の1に削減へ

また、SolarisおよびWindowsの両サーバーでは、バックアップの仕組みを再構築した。ハードディスクとテープ装置を組み合わせたバックアップによって、処理の高速化や信頼性の向上を実現している。

今後、ミサワホームはデータセンターにある約260台超のサーバーのうち、160台あるWindowsおよびLinuxサーバーをすべて仮想化して統合・移行する計画である。サーバー台数が10分の1に、ラックの数が3分の1にと、それぞれ大幅に削減できる見込みだ。

北上氏は「新日鉄ソリューションズはデータベース、UNIXなどに多くのノウハウを持ち、企業向けクラウド・コンピューティング事業『absonne（アブソンス）』で他社をリードしています。当社のデータセンターのあり方についても、今後『absonne』を選択肢の一つとして検討していきたい」と語る。

■ミサワホームが導入したサーバー仮想化環境の概要

